

日本における「道」の受容と展開

—「芸道」の生成を一階梯として—

栞 竹 民

始めに

「道」は「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずる」、「形而下なるもの、これを器といい、形而上なるもの、これを道という」(老子「道德経」)とあるが如く、宇宙の万物の根源であり、普遍的な法則であり、亦、抽象的で奥深い概念でもある。言わば、中国人の素朴な宇宙観、世界観とも言えよう。斯様な「道」は日本において如何にして受容され、展開されてきたのか、それについて考究を施してみたい。本稿ではその一階梯として「芸道」の生成、展開を巡って探ることとする。「芸道」という語は、日本語の漢語として「技芸・芸能の道」の意で現代語では使用されている。それは字音よみの漢語ではあるが、漢語の源となる中国語には出典を求めることが出来なく、所謂日本で作られた和製漢語の一つであると指摘される^①。尚、「芸道」のみならず、「芸道」と

いう語を構成する後部要素「道」との結合によって形成された、中国語には見えない他の技芸のわざに関する和製漢語も認められる^②。例えば、「歌道、弓道、剣道、棋道、茶道、柔道、武士道、入木道、書道」等の日本の伝統的な武芸、芸能、芸術の世界を表す用語が挙げられる。斯様な表現の誕生はほかでもなく、中国の伝統的思想「道」が日本に伝来して、それを受容しつつ、日本的な新しい意味用法が創出されたことに因るのであると言えよう。和歌の作法などを表す「和歌之道」「歌之道」を一語化した「歌道」は早くも平安時代に見られる。また、「入木三分」から成立した「入木」という表現は墨蹟また、「書道」という意味を表すが、室町時代になると「道」をつけて「入木道」という語が作り出され、書道という限定的な意味として用いられる。江戸時代に入れば、武芸、芸能を表す言葉に「道」という造語要素を付けて、新しい表現が多く生じるようになる。例えば、本来の「茶(の)湯」を「茶道」、「剣術」を

「剣道」、「射芸」を「弓道」と言う。また、「弓馬之道」「弓箭之道」という前の時代まで慣用的に用いられていた武士の務むべき道を「武士道」と言い換える。「道」の付加によって精神性、思想性、道徳性に重きを置くという意味合いを持たせて格調の高いものになると考えられる。そればかりか、江戸時代には本来の「道」の持つている思想性、道徳倫理性と相反する「道楽」という逆説的な表現も産出した。この「道楽」は日本語的な造語法に基づいて中国語の「楽道」を反転させて出来た和製漢語であるかと思われる。語順の移動によって意味的にも中国語との違いが見られる。

本研究は日本で生まれたこれらの表現を語史的に考究すると同時に、その成立背景をも合せて考えてみたい。その一階梯として「芸道」を組上に載せて、何時代、如何なる文献にどのような使用され、更に如何なる背景の下で誕生したのか、などの点を巡って考察を施す。

一、日本文献に於ける「芸道」の意味用法

今回、管見した日本で編纂された平安時代から江戸時代までの古辞書類を調べてみたところ、いずれにも「芸道」の所載を確認することが出来なかった。その替わりに、以下のような「芸道」と類義的な表現が見えた。

藝ゲイ (尊経閣善本二卷本色葉字類抄卷下35才⑨)

藝 ケイ云人之能也魚祭反 才一皮一雜一等也

(黒川本色葉字類抄中97才③)

伎藝 キケイ 上湊綺反

(前田本色葉字類抄下57ウ⑤)

藝能 ゲイノウ

(天正十七年本節用集87ウ⑥)

藝能 ゲイノウ

(黒本本節用集64ウ②)

當道 諸藝之道也

(増補下学集138⑦)

Xoguai ショゲイ (諸芸)

Moromoriguai (諸の芸) す

Xodo ショダウ (諸道)

Moromoronichi (諸の道) す

Gueing ゲイノウ (芸能)

Yoqixiuzaza (能きしわざ) 日本や

シナの諸学芸、Gueiarai gacu' xa' guio' xo' su'

(芸は礼、楽、射、御、書、数 すなわち、礼儀、音楽、

弓射、乗馬、書道、算術、NouaQin' xo' gua' (能は

琴、棋、書、画) 楽器、特に琴) の弹奏法、碁(碁) の

打ち方、書道、絵の描き方。(注略) (同右295)

古辞書のみならず、次の古文獻にも彼様な表現が見出される。換

言すれば、古文獻に使用されているからこそ、古辞書に収録された

次第であろう。

1、勅二僧通徳。恵俊一並還俗。一為レ用二其芸一也(続日本紀・

文武四年八月)

2、微臣無藝無能（本朝文粹卷四116①）

3、臣無才無藝、非旧非勲（同右101⑥）

cf 予仁若考、能多材多藝、能事鬼神、（書經・金縢）

cf 吾不試、故藝。（論語・子罕）

4、猶遇臨時之恩、各預不次之賞。蓋重其藝能也。（本朝文粹卷

六160②）

5、情願入仕者本国具述「藝能」、申送太政官（令集解・職員令）

6、次巡事施各「藝能」、頭中将令様、下官朗詠、（兵範記・仁安二年十一月五日）

7、「藝能」、所作のみにあらず、大方のふるまひ、心づかひも、愚

かにしてつつしめるは得の本なり（徒然草187段）

cf 至今上即位、博開「藝能」之路、悉延百端之學。（史記・龜策伝）

cf 初無「藝能」、濫塵科目。（宋・葉適、申省乞仕状）

8、文筆諸「芸」を好給こともかはりまさざりけり。（神皇正統記中・

村上天皇）

9、世のはかせにて萬人の師となる事、諸道かはるべからず（徒

然草150段）

10、「藝能」につけて望をとげ、賞をかうぶるもの、古今数をしらす

多し。（彰考館蔵十訓抄205⑨）

11、道々の才能も、又父祖には及びがたきならひなれば、（同右

179①）

12、諸道二心得タル者ニテ、君ニ近ク被召仕一進セテ、（延慶本

平家物語第一本69才③）

以上に列挙した表現は「芸道」の未出現によって生じたその意味領域の空白を補完したと言えよう。即ち、「芸道」の替りにかかる語が用いられていた。一方、「芸道」が江戸時代までの古辞書に所載していないことについては、二つのことを考えることが出来る。一つは「芸道」という語が江戸時代に至ってもまだ日本語として登録されていないため、古辞書には収録されなかつたのである。もう一つはたとえ語としては生まれたとしても、使用の量、範囲、頻度が限られているため古辞書に掲載すべき程度にまで達していないためであろう。下記の例の示すように、前者ではなく、後者の因由による可能性が高いと看取される。つまり、「芸道」は已に中世に現われたが、芸術的な専門用語として芸論書にのみ用いられて、一般用語に至っていないといった位相的な要因が考えられる。「芸道」は初出例として世阿弥が出家前後の頃に著した能芸論書「花鏡」（応永31年（1424））などに登場したものであると、今回の調査で明らかになった。今のところ「芸道」は世阿弥の手によって創出、使用された用語であると言つてよい。それを受け続く形で世阿弥の女婿であり、また、弟子でもある金春禅竹著の「歌舞髓脳記」（康正2年（1456））にも見えた。言わば「芸道」は最初個

人用語として使用され、後にその家族に拡大したといった特殊な存在である。

13、如し此、上果風より、貴人、白拍子・曲舞舞い。狂女、色々を心得分て、其芸道の筋目筋目を宛てがひて作書する事、能(の)道を知りたる書手なるべし。(世阿弥・三三三) (表記変更有り、以下同)

14、得手あらば、又おろそかなる方あるべしと見えたり。さるほどに、芸道に勝負の証見あるか。然者、正花風を以て、興曲とや云べき。(同右・六義)

15、問。誠、其折・機嫌によりて、出・不出の甲乙あるべき事、疑いなし。此芸道に、稽古長久にして、既に名を得る位になりて、「面白や」と思ふ見感、是は成功なりと(同右・拾玉得花)

16、当道も、花伝年来稽古より、物覚・問答・別紙、至花道・花鏡(是ハ当芸道ヲ誌ル帖々外題之數々也)、如此の条々を習道して、興戯を極め、達人になりて、何とも心のま、なるは、(同右)

17、たゞその一体(「一体」を得たらん曲芸は、又その分その分によりて、安曲の風体・遠見をなさん事、芸道の感用たるべし。(同右)

18、嫡孫はいまだ幼少也。やる方なき二跡の芸道、あまりにあまりに老心の妄執、一大事の障りともなる斗也。(同右・却来華)

19、元雅は、芸道ははや極め尽したる性位なれ共、力なく、五十に至らざればその態をなす事あるまじき秘伝にて、口伝斗にてありし也。(同右)

20、一切芸道に、習々、覚し(「覚し」て、さて行道あるべし。申樂も、習覚して、さて其条々をことごとく行ふべし。(同右・花鏡)

21、幽女をば請じ、諸家の名匠、善悪の御比判、分明仰出されしより、道のすぢめしなじな位々をわきまへ、ふるきを尋ね、あたらしきをしり、えらび定をきしかば、於「藝道」更私なき物哉。(金春禪竹・歌舞髓腦記)

上記した例の示すように、日本に於ける芸道が芸道という言葉で以てその働きを明確化するようになったのは室町時代からではないかと見られる。但し、それらの用例を見てみると世阿弥、禪竹によって用いられた「芸道」は、「日本の伝統的な武芸、芸能、芸術の世界を含む文化の中で精神性を重視する芸の道」といったすべての「技芸、芸能の道」を表す汎用性の高い表現というよりも寧ろ主として「能楽・猿楽の道」のみを指すという限定的な意味で用いられるようである。言わば、「芸道」という用語は日本語に登場した当初は能楽、猿楽という専門的な世界に限って特殊語として用い、現代語のそれと明らかに位相差が存在していたと言える。そのみならず、下記の例のように、世阿弥、禪竹が著した芸道論書において

単独で使用されている「道」も殆ど「芸道」と同じ意味用法を表すように思える。

22、さて能の当座に至る時、其条々をいたし心みて、其徳あらば、げにもと尊みて、いよいよ道を崇めて、年来の劫を積むを、能を智大用とする也（花鏡・奥段）。

23、息男元雅に至るまで、道の奥義残なく相伝終りて、世阿は一身の一大事のみを待ちつる処に、思はざる外、元雅早世するに よつて、当流の道絶えて、一座すでに破滅しぬ。（却来華）

24、夫、申樂家風之道者、世上異端のもてあそびにあらず。（歌舞髓脳記）

25、俗をのぞき、位を立て、品をさだめをかれしより、この道の かゞみとして、玉をみがき花を（かざす）余情・幽美を本とす。（五音十体）

亦、「芸道」以外に、「曲道」「諸道芸」「習道」「力道」「役道」「道花」「花道」などのような世阿弥の手によって「道」を使って創り出された表現も見られる。

26、序破急へ舞をさむる曲道を習得する事や。（花鏡・舞聲為根）

27、さて、かねておほえつる舞歌の二曲をしなじなになにわたりして事をなすならでは、別の曲道の習い事あるべからず。（至花道書・

二曲三體事）

のように能の曲を学習する道の意として「曲道」が用いられて、「芸道」の下位的な一つの道と看取される。

28、諸道藝に於いても、色・空二あり。（遊樂習道風見書）
のように、能樂のみならず、あらゆる芸道の意を表し、「諸道」「一切芸道」「一切万道」などと類義的な關係を持つ。

29、能を知らんと思はゞ、先、諸道・諸事をうち置きて、当芸ばかりに入ふして、（花鏡・奥段）

30、一切芸道に、習々、覚して、さて行道あるべし。（同右）
31、問。一切万道、成就云、（拾玉得花）

すべての芸道の意として用いられる。

32、遊樂之芸風之習道とせんとなり。（十六義）

33、習道の入門は、二曲三體をすぐべからず。（至花道書・

三曲三體事）

34、申樂一座人数、其役々習道次第、（習道書）

「習道」は芸の道または演出に関する道を修得することを表す。

35、諸體に互て広態の見勢を、一身他風に所持する力道、是也。（遊樂習道見風書）

芸道における力量を表す「力道」となる。後に「仏の功德、御利益」という意味として用いられるようになる。

36、棟梁の為手の役道と者、當座の藝にいたりて、樂屋より出て、（習道書）

「役道」はなすべき役の意かと解される。

37、各々安位感花にいたる處、道花得法の見所の切塚也。(九位

次第)

芸道の花即ち芸道の悟得の境地という意味の「道花」と理解されよう。

38、物覚・問答・別紙・至花道・花鏡、如此の条々を習道して、

(拾玉得花)

上記した用例のようにいずれも世阿弥が「道」という造語要素を生かしながら独創した表現である。「芸道」はほかでもなくかかる流れの中で自ずと生じてきたものであろう。更に「非道」「風道」などのように世阿弥が本来の意味の上に新しい意味用法を付加させた表現も見られる。

39、先、此道に至らんと思はん物は、非道を行すべからず。

(花伝書)

40、藝のたしなみはおろそかにて、非道のみ行じ、(同右)

cf 有言遜于汝志、必求諸非道(書経・太甲下)

cf われより他に、領すべき人なきをかくすることはいとひたう

なる事(落窪物語三)

「非道」は、参考例の示すように道理、人情にはずれて非理、非情といった本来の意味であるが、ここでは専門の猿楽に非ざる道、能楽以外の諸道を表すものとして用いられる。

41、抑、たけたるくらゐのわざとは、この風道を、若年より老にいたるまでの、年来稽古を、ことごとくつくして、(至花道書)

cf 掩撃不意、風道在人、豈有常也(魏書・崔浩伝)

「風の吹く道」という本来の意味と異なり、能楽の道、芸風の道という「芸道」に近い意味を表す「風道」となる。

世阿弥が稽古修行を積み、鍛錬工夫を重ねて心の芸・悟得の芸という境地に至る過程、またその境地そのものを「道」を以て象徴させようとした。能などの芸に道の意識が導入されて、その芸能が天地萬物の生々化育していく根源たる「道」の如く、発展し、亦、その精神内容を向上させると共に、正統性も一段と昇華させて、棟梁の地位を強固なものにすることが出来た。「猿楽もそのような風潮の中でしだいに道の意識を高め、田楽や白拍子・曲舞などの他芸能に対して猿楽の道という自覚をもって芸をみがき、競争した。猿楽の道とは猿楽そのものを道と考えているわけで、先人のおこなった猿楽を学ぶ事により自分自分を鍛錬し、人間として大成することができるから猿楽も道なのである。」

以上の考察で「道」という概念が芸能の世界に移入され、多用され得たのは世阿弥の「道」に対しての積極的な活用に大いに關わると言つてよい。また、彼様な「道」と「芸」との結合は後世の芸能の形成発展にも大きな影響を与えたであろう。

二、「芸道」の形成背景

もともと「道」という概念は古代中国に発生し、孔孟の説く「徳」の「道」や老荘の説く「天地萬物自然の源、無為」の「道」にその源流を求めることが出来、早くから日本に伝えられて、日本人の物の考え方に根本的な影響を及ぼした。従って、「道」という考え方や、技芸のわざにおける「道」などのような考え方は世阿弥の生きた室町時代より早くからあった。「たとえば兼好の徒然草には道に關して述べた文章が多く、文の道、管弦の道、歌の道、医の道、恩愛の道、兵の道、世を治める道など非常に多方面にわたり、「道を知れる人」を尊重する主張もすこぶる多い。つまり、「大体、中国（および日本でも）では、とかく技術を道に昇華させようという傾向があるようだ。すなわち最高の技術は、天地の道につながるものとする。戦術（『淮南子』『兵略訓』など）、医術（『黄帝素問』一、二など）、音楽（『阮籍』『楽論』など）、画技（『画学心印』など）すべて然り。以下、「芸道」を誕生させた背景即ち室町時代以前に「道」は日本に於いて如何にして展開、使用されていたのかについて検討してみる。

42、算博士二人。掌レ教二算術一下音時橘反。術法也。導也。

野王案。道也。判道路之道。亦曰レ術也。莊子。古之学二術道一者。鄭玄曰。術藝猶レ藝也。（令集解・職員令）

のように「術、法、道、藝」は相通じる類義的な関係を為すことが分かる。つまり、学問その他の技能に導かれたすじみちを表す。

43、又、或記曰、和歌之道者天神應身萬法妙體。兩句者天地陰陽、胎金二界也。（日本歌学大系第一卷石見女式）

『石見女式』は和歌四式（歌経標式、喜撰作式、孫姬式、石見女式）の一つである。「和歌之道」は「歌道」の由来となり、「天地陰陽」「胎金二界」の示すように道家思想、陰陽五行説及び仏教思想によるもので、「道」を以って「和歌」という学問の玄妙さを象徴したのである。

44、雖下風流如二野相公一雅情如中在納言上、而皆以二他才一聞、不下以二斯道一顯上。思レ繼二既絶之風一、欲レ興二久廢之道一。（同右・古今和歌集真名序）

45、適遇二和歌之中興一、以樂二吾道之再昌一。（同右）
文中の「道」はまぎれもなく「和歌之道」いわば「歌道」のことを指す。尚「本朝文粹」には多種多様な「道」に關する表現が見られる。「思政之道」「用兵之道」「有妨学道」「安民之道」「治國之道」「恢弘道藝」「籀篆等六道」「諸道学生」「文章道」「政道之要」「莫不順天道」「治理之道」「臣子之道」「詩書礼道」亦、「貧而樂道」「文道漸興」「論之政道」「聖道・帝道」「人臣之道」「道德為門戸」「教学之道」「談王道」「学問之道」のように「政治」「戦術」「道德」「学問」「芸能」などの多彩な「道」が多用されている。「楽道」は道を

楽しむことを表し、現代語の「道楽」の墮落的な意味と異なり、中国語の本来の意味のままて用いられている。

46、若クシテ文ノ道ニ遊テ(三三玉絵詞上4ウ③)

「文ノ道」は「本朝文粹」の「文道」と同じく、「武藝の道」「弓馬の道」「弓箭の道」と共に文武両道を表す。

47、吉備大臣入唐習レ道之間、諸道藝能、博達聰慧也、(江談抄・第三雜事)

「習道」は世阿弥の言う「習道」の能芸を学習することと違って、学問を習う意を表す。

48、加之、從二宗家卿一傳二歌曲道一之奥旨一(略)、漸欲レ達二宮商之道一。(玉葉・文治四(1188)年九月)

「宮商」は音楽の五音「宮、商、角、徵、羽」の宮と商の二つ音階のこと、後に転じて音楽の意味として用いられる。「宮商之道」は音楽の道、即ち「歌曲道」を指す。

49、就二歌曲道並弓馬事一、条条有下被二尋仰一事上(吾妻鏡・文治二1186)年八月十五日)

「歌曲」は文道としての和歌の道を言うに對して、「弓馬」は兵法、武芸のことを指す。

50、歌道ノ方ニモヤサシキ男ニテ、(延慶本平家物語第一本97ウ②)

51、源平ノ兵者共互ニ命モ惜ズ、入替、武藝ノ道ヲソ施シケ

ル。(半井本平治物語中卷19オ②)

52、成敗ヨクシテ物ノ道理ヲ知り、中ニモ弓箭ノ道ヲタテカラスベシ。(北条重時・六波羅殿御家訓14条)

「弓箭」は弓と矢、弓矢を射ること、射芸を表すが、ここでは「弓馬」と同じく武芸一般を指すことになる。「弓箭道」は武士が励むべき方面、武士が守るべき道徳を言う。

53、ムナシク月日ツモルトイヘドモ、当道ノ交衆トハ更ニラモヒヨラザリ。(教訓抄卷第一)

54、自ニ生年一廿六歳、始テ加ニ舞道ニ烈。(略)、二道ヲカヘリミレバ、秘曲ミニアマリテ、(同右)

「教訓抄」は伯近真(1177年生)作、日本最古の総合的楽書である。古伝を正し、実態を押え、楽、舞に亘って雅楽を多角度から捉えた。右に挙げた「当道」「舞道」「二道」の他には「諸道」「一道」「自然之道」「此道」なども見られる。そのいずれも楽、舞に關しての稽古、実技、演出、心得、悟得に用いられて、伯近真の道に執しようとする姿勢を呈出する。これは後に世阿弥が展開した「道」の世界と大いに共通点があるように思われる。

55、か様の事は、道の大事にて候へども、口伝を受候ぬれば、凡の入木の道を得候ぬる上には、(入木抄)

「入木抄」は日本の書道史上最も大きな影響を与えた尊田親王作であり、書論として早くから注目、尊重された。書論の中心は「書

を単なる技術・技法としてとらえるのではなく、精神的な高みにまでひきあげた点にある。それは書のことを「入木の道」として捉えたことから感知される。

亦、中世の百科辞書とも言われる『徒然草』にも兼好は人生論、人間論、処世論及び趣味論などについて「道」を以て説いたところが多く見られる。これは兼好の生きる時代「道」に關する認知度、定着度が高かつたことの一側面を反映しているとも理解されよう。

貴族世界に身を置いた兼好は、その世界の必須の教養として次の例のように「まことしき文の道」などの紳士道を説いた。

56、ありたき事は、まことしき文の道、作文和歌管絃の道、(徒

然草第一段)

57、歌の道のみ、いにしへに変わらぬなどいふ事もあれど、(同右第十四段)

58、詩歌にたくみに、系竹に妙なるは幽玄の道、君臣これを重く

すといへども、(同右第一二三段)

この「幽玄の道」は「六芸」の要となる礼、楽に基づく貴族社会の価値の源泉、象徴であると言つてよい。

出家遁世し、専心修道した兼好は、無常觀を訴えながら仏の道、修行道を説いた。

59、仏道を願ふといふは別の事なし。(同右第九十八段)

60、死の近き事をも知らず、行ふ道のいたらざるをも知らず。(同

右第一三四段)

更に芸能人としての兼好は、芸能の諸道に關心を寄せ、芸能の達人を観察しただけではなく、その諸道を心得えた。

61、かの木の道のたくみの造れる、(同右第二二二段)

62、法師は兵の道を立て、夷は弓ひく術知らず、(同右第八〇段)

「兵の道」は上記の「弓箭の道」「武藝の道」と同じく武士の道という意を表す。

63、文・武・医の道、誠に、欠けてはあるべからず。(同右第一二三段)

64、「道」にも誠に長じぬる人は、自ら明らかにその非を知る故に、(同右第一六七段)

65、万にその道を知れる者は、やんごとなきものなり。(同右第一五一段)

66、道々の物の上手のいみじき事など、かたくなる人のその道知らぬは、そぞろ神のごとくに言へども、道知れる人は更に信

もおこさず。(同右第七三三)

67、万の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。(同右第七九段)

のように、一つの専門からあらゆる専門まで道があることを言つてゐる。亦、道は次の例の如く、専門そのものを表す意として用いられている。

68、なほまことに、道の主とも覚えぬべし。(同右第一六八段)

69、「本より深き道は知り待らず。そぞろごとを尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、(同右第一三五段)

更に「道を学する」という連語形式が見られ、世阿弥の「学道」という熟語の形成の本とも考えられる

70、道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、(同右第一五二段) 有職故実の道を心得えた兼好は飲酒の作法の一つとして「魚道」という表現を披露した。爾来、室町時代に成立した古辞書に「魚道」という語が収録されるようになる。

71、「さにはあらず。魚道なり。流れを残して、口のつきたる所をすすぐなり」とぞ抑せられし。(同右第一五八段)

「魚道」は底に残った酒を捨てず、魚が旧道を過ぎるように口のついた所をすすぐという比喩的な意味を表す。

以上、平安鎌倉時代の史書、古記録、物語、随筆、芸論書などに現れた「道」を考察すると、和歌をはじめとする雅楽、管弦、弓馬、入木、医などのような芸能、学問、技芸の世界に「道」が幅広く用いられていることが明らかに。

世阿弥が創出した「芸道」は、自分の正統性、独自性、神秘性を際立たせようとする意識を媒介に、この諸の道という土台の下で、始めて出来たものであろう。つまり、彼様な諸道は「芸道」誕生の土壌とも言えよう。但し、次の例のように、世阿弥の「道」についての受容は直接その「道」本拠である道家にも及んだと見られる。

72、浅文風道の道たる、常の道にあらず。常の道を踏で、道たるを知るべし。これ浅きより、(九位次第)

73、道可レ道非「常道」、名可レ名非「常名」(老子・道德経上体 第一)

「道の道たる、常の道にあらず」はほかでもなく有名な「道德経」から撰取したものを翻案したのである。世阿弥が老子の「道」を用いて、能藝の根本をなす原理としての二曲の幽玄を象徴した上で、更に「常の道を踏で道たるを知べし」というように、その修行法をも説いた。即ち「常の道とは規範であり法則であり格である。その規範・格に絶対に従って、その規格に従って稽古修行の劫を積み、遂に格を出で格をはなれるといふ絶対無礙の境に進むのが東洋的な修行法である。格に入らずしては、絶対自由の境には入り難い。従って先づ「常の道」を踏み行つて、それがやがて「道の道たる道」に達する。これは「以至_二於無為_一。無為而無_レ不_レ為_一」(老子道德経忘知)の無為自然の境地に至るのとも相通じるものであろう。次に「芸道」及び諸の道の源泉である中国の「道」について見てみよう。

三、中国の「道」

「道」はもともと路のようなもの、人が往来するところである。つまり様々な通路、道路、道程と言える。その往来の意味から方向

という意味も派生して、

74、誰能出不由戸者、何莫由斯道也（論語・雍也）

の「道」が、その例となる。亦、以下の例のように、「道」は現にある道を超えて、あるべき道、あるはずの道という抽象的神聖な内容を含むものとして、実際に十分顕在化していない規範的な性格をも持つ。

75、且臣聞之、哭有二道、有愛而哭之、有畏而哭之。（礼記・檀弓上）

のように、種類、その方面という意味を表す。

76、治世不一道、便国不必法古。（商君書・更法）

77、凡有道者、有德者、使教焉。（鄭玄注、道、多才藝）（周礼・春官大司徒）

春宮大司徒）

のように技芸、技術、方法のことを言う。更に次の「莊子」の例のように技術以上の「道」つまり、修業を積み重ねて到達した「無為自然」の「技芸」の最高究極地を言う。この「道」は「歌道」をはじめとする「芸道」などのような「道」によって出来た芸能に関する表現の源流とも思われる。この「無為自然」の「道」は芸道の極致として最高の努力すべき目標だと追究される。

78、庖丁釋刀、對曰、臣之所好者道也。進乎技一矣。始臣之

解牛之時、所見無非牛者一。三年之後、未嘗見全牛一也。方今之時、臣以神遇、而不以目視。官知止而神欲

行。（莊子・養生主）

のように「技」から「道」に至るまでの修行、その修行道による「道」への変化過程などを述べている。これは、「その根源が精神の錬磨において求められ、その目標が精神的な適中、即ち射手が根本においては自分自身を的として狙い、そしてその際遂には恐らく自分自身を射中する處にまで達する適中に在るような技倆と解している」といったことの根源とも言えよう。

中国の「道」は右のような「道」以外に、最も代表的なものとして老子をはじめとする道家の「道」と孔子をはじめとする儒家の「道」とを挙げる。「道」を天地万物の源、自然哲学的な実在というような意味に使っているのは老子を鼻祖とする。

79、道生一、一生二、二生三、三生萬物。（老子・道德經

道化）

万物の源たる「道」が如何にして万物を生成するかの過程を述べている。「道生一」は、道が二元気を生ずる。「一」とは次の例のように、陰陽二気のまだ分離していない根本の気を指す。

80、一陰一陽之謂道（易・繫辭上）

81、道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。（老子・道德經体道）

儒家の言う一般に守るべき「仁」「義」などのような人の「道」に対して恒常不変ではない「天地之始」「萬物之母」の「道」を説

いている。つまり、天地の生成に先だつて混沌とした物が有る。形も何もないもので、永遠に存在不滅し、亦、あらゆるところへも自由自在に進入する。これは天地の母たるべきもの「道」である。更に、人間を含む一切万物がそこから生じ、そこに亦帰つて行く究極的な実在としては「天地の根」とも呼ばれる。

82、人法_レ地、地法_レ天、天法_レ道、道法_レ自然。(同右・象元) 人格、意志を持たない自然の「道」である。

83、道常無為、而無_レ不_レ為。(同右・論徳)

「無為」の道に則るならば、万物はのびのびと自然の生成変化を遂げるであろう。だから技芸はこの「無為」の境地への昇華を目指すのである。

84、天道運而無_レ所_レ積。故萬物成。帝道運而無_レ所_レ積。故天下歸。聖道運而無_レ所_レ積。故海内服。(莊子・外篇天道)

「天道」は「帝道」「聖道」に対して「天」を人と切り離して、天体の動いて行く道、人為的なものでなく、自然のものであることを表し、「書経」「詩経」などの言う人格化、神格化した「天帝の律法、天の法則性」の「天道」や儒家の「王道、人道」と類義的に把握する「天道」と異なる。

道家の自然万物の生成の源である「道」に対して、儒家の「道」は政治的、思想的体系、道徳、道義、正直、物事の道理、規則などのような概念を持つものであると思われる。「孔、孟では、道とは、

人が自己を高めるための、自己の良き萌芽を拡充するためのステツプであつた⁸⁾。つまり、その中心となるのは、人が守るべき礼、仁、義、智、忠などの徳という道である。

85、富與貴、是人之所欲也、不以其道得之、不處也。(論語・里仁)

86、士志於道、(同右)

87、吾道一以貫之哉、(同右)

88、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣、(同右)

89、夫子之言性與天道、不可得而聞也已矣、(同右・公冶長)

90、子謂子產、有君子之四道焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民也義、(同右)

91、所謂道、忠於民而信於神也。(左伝・桓公六年)

92、得道者多助、失道者寡助。(孟子・公孫丑下)

尚、宗教的な「道」としては道教、道教の仙術・方術、組織仏教或いは仏教徒などにも見られる。「道」は彼様な遍在性、包括性という性格を持つ概念として中国の思想、政治、文化において頗ぶる重要な位置を占めている。

中国には古くから「技」と「道」、「芸」と「徳」を区別し、技よりも道を重視し、芸より徳を上位とする思想がある。これは上掲した「莊子」の「臣之所好者道也。進乎技矣」とする考えや、次の「礼記・楽記」の「徳成而上、藝成而下」という主張などからも推

察される。

93、是故德成而上、藝成而下、行成而先、事成而後。(礼記・楽記第十九)

芸の修業よりも寧ろ人格的、精神的修練を行うべきことは最も重要であると主張する。こうして初めて芸の最高究極地に至るといつた考え方が日本の芸道にも受容、応用された。「徳」とは「芸術家によって体得された道を言い、道の自覚者一哲人こそが真の芸術家である⁹⁾」。世阿弥が目標とするものは正に道の自覚者であろう。彼様な芸を人間の道徳と一体化し、精神性、人格性を求めようとする主張は中国の芸能の世界においても普遍性を具している。つまり「形よりも心を重視する芸術、心境の芸術もしくは精神の芸術として特徴づけることができるであろう¹⁰⁾」。日本の伝統的芸能もそれと相通じるものが多くあると見られる。それは次に挙げる中国の書道に関する論述からも伺える。

94、故知書道玄妙、必資神遇、不可力求也。機巧必須心悟、不可目取也。(唐・虞世南・筆髓論)

「書の道」は玄妙であり、前出の「徒然草」の「妙なるは幽玄の道」を彷彿させ、「心悟、神遇」という心境、精神のことを重要視する。それを「道」として自覚し、努力の目標とする。

95、書之妙道、神彩为上(南朝齊・王僧虔・筆意贊)

96、然心存委曲、每為一字、各象其形、斯造妙矣、書道畢

矣。(東晋・衛鑠・筆陣圖)

97、言心聲也。書心画也。声画形、君子小人見矣。(漢・楊雄・法言・問神)

98、書者意也。(漢・蕭何・書史会要)

99、必得書意、軫深点画之門皆有意、自有言所不尽得其妙者。

(晋・王右軍・自論書)

100、書法猶釈氏心印、發于心源、成于了悟、非口非手伝。(唐・

光・論書法)

101、書、如也、如其学、如其才、如其志、筆情、墨情、皆以其人之性情為本。(清・劉熙載・書概)

「書」は「心」を根源として、その造形を「心」において捉え、悟り、「非口非手伝」の「意」を「妙」たるものとする。「書」は他の芸術と同様、「心求委曲」の如く人間の感動を表現するものとして、形と心との二面性を備えるが、それを「心、意、神」として表現しようとするところに、中国の書道の本質的な特徴が見られる。日本の伝統芸能の心悟性、精神性と一致するところもあるが、「心より形を重視する芸術がヨーロッパのそれである」と相反するものである。「道」を悟得することは中国の書の真髓と言えよう。

結 び

「芸道」の使用は世阿弥に始まる。それは「学問や芸能に道の意

識が高まった中世³⁾であるという風潮の中で、世阿弥が前の時代の「道」を積極的に吸収、活用して生まれた表現である。移入概念としての「道」は日本に於いて眩目するに値する開花が出来たと見えよう。「芸道」が中国語には見えないが、但し、「道」という概念及び芸能に「道」の意識が持ち込まれて精神性、思想性を向上させるという考え方は中国から受容されたものである。

「芸道」というのは芸を實踐する道であるとも理解される。言わば様々なジャンルにあつて芸を演ずるときの演じ方は「芸道」でもある。この「方(型)」に法則性、規範性更に独自性を内含すると考えられる。家柄や門流、流派の「方(型)」の正統性を主張し、神秘化を図ろうとする意識の下で「道」という抽象的概念が導入された所以の一つであろう。その「方(型)」を聖なる精神的境地に昇華させるのは芸道の目指すところである。つまり、具体的な修業、体得のみならず、人格的、精神的な修身、洗練を通じて「道」を悟得し、「無念、無理、無心」という芸道の極致に至る。これは本来儒・道の言う「道」と一脈相通じて、中国の書道にも見られるものである。

注

- 1、「芸道」ということは世阿弥の「花鏡」に「一切芸道に習々覚して」とあるのがもつとも古い用例で、室町時代から使われていた(『日本大百科全書』8)、「私の知るかぎりでは今のところ、康正二年(一四五六)に金春禪竹が書いた『歌舞髓脳記』に見えるのが芸道という語の初見であ

る」(日本思想大系「近世芸道論」)「近世芸道思想の特質とその展開」(西山松之助。確かに「漢語大辞典」に「藝道」は載っているが、その用例はいずれも近代のもののみであり、「技巧」という意味と注釈されている。形成年代から見れば、日本語の「芸道」は、中国語のそれより早く登場しただけではない、使用範囲も意味用法も広い。従つて中国語にあるとはいへ、和製漢語の一つであると考えられよう。

- 2、「しかし、道という考え方や、技芸のわざにおける道、歌の道、弓馬の道、などという考え方は早くからあつた」(日本思想大系「近世芸道論」)「近世芸道思想の特質とその展開」(西山松之助)。

- 3、「書道」は現行の中国の辞書類にはいずれも掲載されていないことから少なくとも一般用語として使用されていないと推定される。しかしながら、古い時代の書道に関する専門研究書にはその所在が確認できる。が、「書道」という用語は「書」という領域においてのみ用いられて、「書」の特殊用語から脱皮は出来なかつたため、一般用語になり得なかつた。今日の中国では一般として「書道」を「書法」と言う。それは唐代の「書法を尚ぶ」に起因するように見える。

- 4、中国語の「楽道」は「樂于称道。喜好聖賢之道。喜歡修道」(『漢語大辞典』、漢語大辞典出版社)の如く日本語の「道楽」のような意味を持っていない。

- 5、「日本大百科全書」8(小学館1988、12、第五刷出版)の「芸道」の条に依る。

- 6、「漢語大辞典」に「力道」が収録されているが、「方言、効力、作用、力气、力量」のように現代中国語の方言として用いられている。世阿弥の「力道」と異なる意味である。

- 7、「役道」は中国語はもちろんのこと、『日本国語大辞典』にも掲載されていない。

- 8、「道化」は「日本国語大辞典」に未収録。
- 9、金井清光『風姿花伝詳解』の「風姿花伝（序）」（明治書院昭58、10、15）
10、同注⑨
- 11、「中国文化叢書2思想概論」『II世界論』（赤塚忠他・大修館書店平成3、
7、1・6版）
- 12、日本思想大系（岩波書店）『古代中世芸術論』の「入木抄」解題（赤井達郎）
- 13、能勢朝次『世阿弥十六部集評釋』上（岩波書店昭31、4、30）
- 14、オイゲン・ヘリゲル著「弓と禪」稲富栄次郎・上田武訳（福村出版19
67、6、20・5刷）
- 15、同⑪
- 16、福永光司「中国の芸術哲学」（『講座美学1美学の歴史』今道友信編集・
東京大学出版会1984、5、30）
- 17、同⑬
- 18、同⑬
- 19、同⑬
- 20、同⑨
- 21、同②

検案文献

本稿で調べた中日両国文献は「国文学攷」第159号に掲載された「減氣・駿氣・元氣」小考」を参照されたい。

附記

本稿は、平成十年度～平成十二年度文部省科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果の一部として執筆したものである。

——らん・ちくみん、広島市立大学教授——